

若手研究者コラムリレー

神野 周太郎 (じんの しゅうたろう)

プロフィール

大阪電気通信大学 特任准教授
日本体育・スポーツ・健康学会の専門領域: 体育哲学、体育科教育学
※ その他 野外教育学

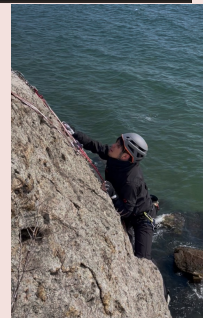
2013年3月 仙台大学 体育学部 運動栄養学科 卒業
2015年3月 仙台大学大学院 スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻 修了
2018年3月 国士舘大学大学院 スポーツ・システム研究科 スポーツ教育コース 修了
その後、東京学芸大学 教育学部 生涯スポーツ教室 にて特任講師を、長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科 にて専任講師を経て、現職に至る。

<https://researchmap.jp/shutaro-jinno>

E-mail: j.shutaro@gmail.com



地域連携: 無人島上陸
※ 学生とともに



野外活動
ロッククライミング

わたしの研究

運動やスポーツを経て生じる 人間の変容を捉える/物語る

個人的な感覚の話から。今の自分があるのは…**そうだ、あの時の出来事のおかげ(せい?)**だと振り返ることができる。「私」の形成に寄与した場面は運動やスポーツをする過程や前後の活動の中にもあった。あの時の挑戦が、我慢が、達成が、夢中になれたことが今の「私」を形成しているという感覚がある。

ここからは個人を越えて。似たような話や出来事は他者からも伺う機会があり、教育対象である子どもや学生をみていると明らかに散見できる。過去の出来事が自己を形成するという現象は、人間にとって往々にして身に覚えのあるコトな訳だ。

教育学の分野では、人間のあらゆる変化の起点になる出来事は「体験」「経験」という概念で、そして人間がある目標に向かって変化してゆく様子は「成長」という概念で語られる。

私の研究テーマは、経験と成長、これらの教育学的な概念をメガネにして、人間が運動することにどれだけの意義や価値があるのかをあらゆる実践場面を射程にして語ることです。

【研究対象の事例】

体育の授業における子どもの経験
体育模擬授業がもたらす学生の成長
身体運動を試みる場面の認知(アブダクション推論と学習)
ロッククライミングする人間の経験
野外活動における人間変容の契機

わたしの渾身の論文・書籍・記事



神野 周太郎 「身体運動を試みること」をバース哲学に基づいて解釈する試み: アブダクティブ身体運動という概念の展望

・ 体育哲学年報 54号: 15-20, 2024.

神野 周太郎 「体育の哲学 担当: 体育哲学と民主主義の思想 - 『民主主義と教育』の再評価と体育の未来 -」. 不昧堂, 2024.

なんでも帳

コロナ禍は良くも悪くも私に色々な経験をもたらしました。中でも今日までに大きな影響? 痕跡? として残っているのが趣味として定着したボルダリングです。ボルダリングをするようになって興味を惹かれたのが、クライミング界隈では、ロッククライミングとスポーツクライミングがアマチュアの人たちでも明確に区別され、今日のクライミング文化の変容っぷりに戸惑っているということ。

ロッククライミングの屋内練習として誕生し、次第にスポーツとして発展した人工壁登攀スタイルのスポーツクライミング(種目は大まかに3つ、スピード・リード・ボルダ)は今やかつてのクライミングスタイルとはかけ離れたアクロバティックなムーブで人々を沸かせます。

私も例に漏れず時代の流れに身を任せ、アクロバットムーブをかまし、時に脱臼に迫るような怪我をする始末。でも、やめられません。時に命の危険を横目に行うクライミングは、

とんでもなく面白い遊びでした。そして、今まさに文化変容の過渡期でもある。遊びとしても研究対象としてにこの上なく最高のスポーツです。

さて、今日の大学教員の多忙さに白目を向くこともあります。しかし運動やスポーツを研究対象にする者として、どんなに忙しくても、実践者として運動やスポーツに没れる至福の時間は無理矢理でも設けていきたいです。



日本体育・スポーツ・健康学会
若手の会からのお知らせ

2018年8月に日本体育・スポーツ・健康学会若手の会が発足しました! → [メーリングリスト登録フォーム](https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2):

<https://goo.gl/forms/zGMPdPq5fY3kcB5q2>

学会大会、研究会等の開催や報告者募集に関する案内、公募や助成金情報等に関する情報提供を配信予定です。皆様からも、メーリングリストで周知したい情報がありましたら、下記までご連絡ください。

taikugakkaiwakate@gmail.com

